

「八月十五夜、於鳥羽院、詠翫池上月和歌」序 注釈

A Commentary on the “Preface to *Waka*-reading at *Tobain*, Celebrating the Full Moon on the Pond, Fifteenth Night in Mid-autumn”

鈴木徳男
北山円正

キーワード 鳥羽院、和歌会序、源経信、翫池上月

『後拾遺集』撰進の応徳三（一〇八六）年から八年目、寛治八（一〇九四）年八月十五日に鳥羽院で挙行された歌会の序文を注釈する。この歌会は、『中右記』に詳細な記録が残り、歌会の序も現存する。また詠じられた和歌が諸書にとどめられているという状況にあり、その歌会の実態をうかがう上では、非常に恵まれていると言えよう。本注釈では、この歌会にどのような意義があり、和歌史上においていかなる位置を占めるのか等々の問題を考える一助となればと考えて、読解を行うものである。底本は、『扶桑古文集』（東京大学史料編纂所影印叢書2、『平安鎌倉記録典籍集』八木書店、所収）による。「史料紹介 本所所蔵「扶桑古文集」」（東京大学史料編纂所報）第二号、一九六八年）を参照した。先ず全文を掲出して句読点を付し、対偶を明らかにするために該当部分を二行書きにし、その頭に括弧を付けた。

本文のあとに【校異】を示す。校合に用いた本は、『王沢不渴抄』（王沢）、国史大系『本朝文集』巻五十（文集）。(1)(2)(3)の段落に分けて、段落ごとに訓みを示し、語釈を施し、現代語訳を付した。付説として、『中右記』の記事によって歌会の模様を述べ、この時の詠と思われる和歌を載せ、最後に『中右記』の当該箇所を本文を引き、訓読文を示した。なおこの序の注に、佐藤道生『扶桑古文集』訳注（抜萃）（池田利夫編『野鶴群芳』笠間書院・二〇〇二年、所収）がある。あわせて見られたい。

八月十五夜¹、於鳥羽院²、詠翫池上月和歌³

大納言経信⁴

(1)城南有一勝境。蓋太上皇幽棲之深宮也。
〔地形幽奇、〕当玄覽蒙微
風景蕭索。〔抽丹心恣詠〕

辟之者、皆是月卿雲客之旧僕、
吟之者、莫不詩情歌思之新才。

(2)于時 池上有月、水因月増映、
月前望水。月因水添光。 是以 或調糸竹賞翫、
〔或尋筆硯嗟歎。〕 況復 清光
素影

之臨碧沼而皎々、鵷鷺蕩颺之翅負氷、
之透翠簾而沈々、窈窕錦繡之袖翻雪。

(3)遊宴之美、不能地忍。請以翫池上月、各為和歌題目、其詞云、

〔扶桑古文集〕

【校異】

- 1夜―□(底本)。他本によつて補う。 2於鳥羽院―侍太上皇鳥羽院(他本) 3詠翫池上月和歌―同詠翫池上月応製和歌一首(并序正二位行大納言兼太宰帥官源朝臣経信上)(王沢)・同詠翫池上月応制和歌序(文集) 4―大納言経信―ナシ(他本) 5也―ナシ(他本) 6玄覽―玄□(底本)。他本によつて補う。 7旧僕―□僕(底本)・旧友(他本)。「旧」は他本によつて補う。 8皎々―皓々(他本) 9鵷鷺―鵷□(底本)・鴛鴦(他本)。意によつて改める。 10沈々―□々(底本)。他本によつて補う。 11請―ナシ(他本)

八月十五夜、鳥羽院にして、池上の月を翫ぶと詠む和歌

大納言経信

八月十五夜―仲秋八月十五日の夜。ここでは寛治八年のそれ。盛唐の

杜甫に「八月十五夜月二首」があり、十五夜についての詩は、杜甫に始まるというが(吉川幸次郎「杜甫と月」全集第十二巻・筑摩書房、一九六八年)、杜甫にはこの夜の月を特別なものと見る意識はないらしい。十五夜の月を特別に賞翫し始めるのは、中唐の白居易らから始まると考えられる。「華陽觀中、八月十五日夜、招友翫月」(『白氏文集』卷十三・0627)などがその例。日本では、白詩撰取とともに仲秋の名月に対する関心が高まり、觀月の詩宴の風習が、菅家において創始された(後に道真は「菅家故事世人知」(『菅家文章』卷四・298「八月十五日夜、思旧有感」)と自負する)。「翫」の項にあげた紀長谷雄の用例は、菅家の望月亭での作。その後、元慶四(八八〇)年八月に道真の父是善が薨去して、菅家では廃されたが、寛平九(八九七)年に醍醐天皇が催してから、宮廷でも行うようになった(北山円正「菅原氏と年中行事―寒食・八月十五夜・九月尽」『平安朝の歳時と文学』和泉書院、二〇一八年)。和歌では、『公忠集』に「延喜五年八月十五夜」の詞書を持つ詠(9)が早い例。『貫之集』には八月十五夜の屏風歌が見える(232・405・488)。勅撰入集は、『後撰集』(卷六・秋中、325・326・336)から、『拾遺集』(卷三・秋)に「屏風に八月十五夜池ある家に人あそびしたる所」の詞書(すなわち屏風歌)で、源順の「水の面に照る月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける」(171)が入集。同じく「水に月のやどりて侍りけるを」とある、「秋の月なみの底にぞ出でにける侍つらん山のかひやかならん」(能宣172「水に月のやどりて侍りけるを」)も八月十五夜の詠か。

鳥羽院―白河院(一〇五三―一一二九)が造営した離宮。鳥羽殿とも言う。応徳三年に退位後の後院とされた。平安京九条大路から南へ

約3km離れ、現在の京都市伏見区竹田・中島のあたりにあった。當時は鴨河・桂川の合流点であり、また朱雀大路を延長した鳥羽の作り路が達しており、まさに「平安京の全体を背後にひかえた池水の広がりそのもの」（千本英史「水閣の眺望―鳥羽離宮をめぐる―」論集平安文学1『文学空間としての平安京』勉誠社、一九九四年）といわれるような、雄大な景観であった。『扶桑略記』応徳三年十月二十日条に「公家近來九条以南鳥羽山莊、新建後院。凡二百余町焉。近習卿相侍臣地下雜人等、各賜家地、營造舍屋、宛如都遷。讚岐守高階泰仲依作御所、已蒙重任宣旨。備前守藤原季綱同以重任。献山莊賞也。五幾七道六十余州、皆共課役。堀池築山、自去七月、至于今月、其功未了。洛陽宮々無過於此矣。池広南北八町、東西六町、水深八尺有余。殆近九重之淵。或模於蒼海作嶋。或写於蓬山。量巖。泛船飛帆、煙浪渺々。飄棹下碇、池水湛々。風流之美不可勝計」とある。遊宴の場は、『中右記』に「引公卿令參御先鳥羽殿南御所寢殿東面」とあるので、鳥羽院の南殿。

翫―愛でる、賞翫する。

秋月高懸空碧外、仙郎靜翫禁闈間（『白氏文集』卷十四・0737）
「八月十五日夜、聞崔大員外翰林独直、对酒翫月、因懷禁中清景、偶題是詩」（）

古之翫月、多在斯宵（『本朝文粹』卷八・208、紀長谷雄「八月十五夜、陪菅師匠望月亭、同賦桂生三五夕」序）

夫天下之翫月者、今宵為最、洛外之挾地者、斯處為先（『本朝統文粹』卷八、藤原実範「八月十五夜、於遍照寺翫月詩」序）

は、八月十五夜における例。

池上月―水面に映る月影。池に映る十五夜の月を詠じる詩序の例には、

对絳霄之明月、倒素光而映波。玉鏡沈景、与止水而可鑑、金波凝色、混細浪而難分（『本朝文粹』卷八・206、三善清行「八月十五夜、同賦映池秋月明」序）

懸鸞鏡於波心、似楊州之鑄出、浸水綃於潭面、如泉室之織成（同・209、菅原淳茂「八月十五夜、侍亭子院、同賦月影滿池、応太上法皇製」序）

などがある。歌題の先行例として、『後拾遺集』（卷十五・雜一836）に「池上月をよめる」として、良暹法師詠「月かげのかたぶくまにいけみづをにしへなるとおもひけるかな」がみえるが、詠歌事情は不明で十五夜とは限らない。十五夜の例は本歌会の題が早い例。

大納言経信―源経信（一〇一六―一〇九七）。『中右記』永長二（一〇九七）年閏正月二十七日条に次のように見える。

入夜近江前司為家朝臣被來。暫言談次被申云、去六日帥大納言、於府被薨了（年八十二、一日初使上洛云々）。正二位行大納言兼大宰権帥源朝臣経信者、故民部卿道方卿男。後一条院御時以後、為殿上人。後冷泉院御時、加右中弁、補藏人頭、初任參議大弁。上皇御宇、昇大・中納言。當時寛治八年六月、兼任大宰権帥、去々年赴任。今年閏正月六日、於鎮西府薨。兼任漢之学、長詩歌之道、加之、管絃之芸、法令之事、能極源底。誠是朝家之重臣也。仍浴不次之恩、大納言兼権帥也。希有之例歟（當時一大納言也）。

和漢兼学、詩歌に秀で、管弦や法令にも通じたマルチな経信を朝家の重臣と称えている。本序(2)段落に「糸竹を調べて……」とあるように歌会の前に管絃の遊び(船楽)があった。『中右記』(付説参照)によれば、「帥大納言(経信)・備中守政長朝臣、御船に候すべししてへり。御隨身を以つて相尋ねらるる間、已に数剋に及ぶ。兩人追ひて参加せられし後御船を出す」とあり、遅参したらしいが、白河院の船に陪乗して琵琶、朗詠を勤めている。

この序執筆の時、すでに七十九歳の高齢、その晩年にあたる。前年に大宰権帥に任ぜられているが、実際の筑紫下向は、翌年の七月。この鳥羽殿での歌会の四日後、十九日には藤原師実主催の高陽院七番歌合の判者を務めている。当時の経信の歌人としての位置をよく示している。高陽院七番歌合は、永承五(一〇五〇)年に師実の父頼通が主催した撰閑家の晴儀歌合を先例とした催しであり、子の俊頼も歌人として参加している。

経信が、永長二(一〇九七)年閏正月六日に任地で没した時、父に従っていた息子俊頼は、上洛後、堀河天皇の歌壇で活躍する。俊頼の時代の始まりである。

(1)城南―一勝境有り。蓋し太上皇幽棲の深宮なり。地形幽奇にして、風景蕭索たり。玄覽に当たりて微辟を蒙る者、皆是れ月卿雲客の旧僕にして、丹心を抽いで詠吟を恣にする者、詩情歌思の新才ならざる無し。

城南―洛陽城(または長安城)つまり平安京の南・南方。

延喜元年秋、左丞相命詩酒於城南別第、賀外史蔵大夫懸車之齡

也(『雜言奉和』、紀長谷雄「秋日陪左丞相城南水石之亭、祝外史大夫七旬之秋、応教」序)

「早夏陪幸太上皇城南水閣、同賦松樹臨池水、応製詩」序(『本朝統文粹』卷九、大江匡房詩題)

天下佳境、雍州為最。就州言之、城南為甲(同卷九、藤原敦宗「初冬於仙院書閣、同賦仙洞多松竹詩」序)

後の二例は鳥羽院のこと。

一勝境―「勝境」は、風光明媚の地、すばらしい景色の地。

雍州上眺、洛城南面、有二勝境。蓋乃左相府之別業矣(『本朝文粹』卷九・270、大江以言「暮秋陪左相府宇治別業即事」序)

禁闕東南、不經幾里、有二勝境、如三神山(『本朝統文粹』卷十、藤原敦光「三月三日、侍太上皇宴、同詠逐年花盛、応製和歌」序)

蓋……也―まさに……である。

天台山者、蓋山嶽之神秀者也(『文選』卷十一、晉の孫綽「遊天台山賦」序)

紫宮之東、横街之北、不經幾程、有二仙居。蓋太上皇遁世之別館也(『本朝文粹』卷十・306、大江朝綱「暮春同賦落花乱舞衣、各分一字、応太上皇製」序)

冒頭の文型―「地域・地名、有……名所・景勝地……、某宮・某邸宅・別業」といった形で、これから繰り広げられる詩会・歌会の場所を提示している。

洛城南極、有二名区。刑部尚書之客亭也(『詩序集』下・12、大

江家国「暮秋於刑部尚書陶化坊亭、同賦鶴是作仙禽、応員外端教詩」序)

「城南」「一勝境」で挙げた例も参照。

太上皇―太上天皇。白河院（一〇五三―一一二九）のこと。歌会の主催者。

幽棲―世俗の煩わしさを離れてひっそり暮らす、閑居する。

況復南山曲、何異幽棲時（『文選』卷二十六、齊の謝朓「在郡

臥病、呈沈尚書」。李善注「謝靈雲南山詩曰、凝此永幽棲」

近自覺舍味道、遠至幽栖晦迹（『本朝文粹』卷八・202、源順

「沙門敬公集序」

幽棲風暗、青溪之雲埋跡、素意水清、北海之波伝声（『本朝統
文粹』卷四、藤原正家「京極前太相国辞撰政」第三表）

深宮―世俗から隔たった奥深い地にある宮殿。木々や池水に囲まれ
た、幽邃な雰囲気の漂う鳥羽院を「深宮」と捉えた。

洛城以東、有「一勝地」。都督大王之深宮也（『本朝文粹』卷八・

221、源順「後三月陪都督大王華亭、同賦」今年又有「春、各分

一字、応「教」序）

竹苑旧儀煙未變（此寺元為延喜中書大王深宮。故云）（『本朝無

題詩』卷九・582、藤原明衡「初冬遊「世尊寺」」

元来は、

自幽深宮、委政讒賊（『文選』卷五十二、魏の曹冏「六代論」

唯向深宮。望明月、東西四五百廻円（『白氏文集』卷二・0131、

「上陽白髮人」）

最弟皇子之出幽洞焉、弥入畢竟空之觀、無及公主之留深宮

矣、類迷「愛別離之哀」（『本朝統文粹』卷十三、菅原忠貞「皇后

宮卅九日願文」）

のような、宮殿の奥深いところの意。ここから意味を転じたのであ

ろう。

地形―土地の形状。鳥羽院は広大な池を中心に、その周囲に築山を配
するなど、変化に富む地形であった。

物変随「天氣、春生逐」地形（『白氏文集』卷六十六・3250、「早

春即事」）

天氣爽也、地形勝也、物色幽也、人心切也（『本朝文粹』卷八・

209、菅原淳茂「八月十五夜、侍「亭子院」、同賦「月影滿「秋池」、応

太上法皇製」序）

幽奇―奥深く珍しいさま、ひっそりとして奇趣に富んだ様子を言う。
ほとんどの例が風景や庭園について言う。先の『扶桑略記』にある
とおり、仙界の趣を写し取ってもおり、「地形」は「幽奇」の趣を
湛えていた。

久為「山水客」、見「尽幽奇物」（『白氏文集』卷七。0333、「湖亭晚

望「残水」）

永寧坊中、有「一仙宮」。風流幽奇、水石清麗（『本朝文粹』卷十・

296、源順「三月三日、於「西宮池亭」、同賦「花開已「匝」樹、応「教」

序）

淳風坊裏、有「一名区」。泉石之幽奇、甲「天下之勝境」矣（『本朝統

文粹』卷九、藤原明衡「春日陪「淳風坊水閣」、同賦「蔭「花調」雅琴、

詩」序）

また、

今日辰時許、修理大夫俊綱朝臣フシ臥見亭、已以焼亡。件処風流勝

地、水石幽奇也。悉為「煨燼」。誠惜哉（『中右記』寛治七年十二月

二十四日）

遙望「東面」、雲海茫茫、孤帆連「水」。地形幽奇、風流勝絶也（『中

右記部類』卷二十八・公卿勅使・永久二年二月一日。伊勢国の風景）

などと、古記録にも見える。

蕭索—もの寂しげなさまを表す語。このあたり一帯は、世俗からは隔絶しており、幽邃な趣をたたえていた。

秋日蕭索、浮雲無光（『文選』卷十六、梁の江淹「恨賦」）

涼風冷露蕭索天、黃蒿紫菊荒涼田（『白氏文集』卷十二・986、

「東墟晚歌」）

風驚蕭索、蒼天卷其群翳、雲収蒙朧、碧落晴而疎闊（『本朝文粹』卷八・206、三善清行「八月十五夜、同賦」映池秋月明」序）

玄覽—天子がご覧になること。

睿哲玄覽、都茲洛宮（『文選』卷三、後漢の張衡「東京賦」。薛綜注「言通見此洛陽宮也」。李善注「広雅曰、玄、遠也」）

晴初駐蹕馳玄覽、一点孤浮江上船（『文華秀麗集』卷下・103、

仲雄王「奉和河陽十詠四首」ノ「江上船」）

妙管清歌、且夕於甞續之下、春光秋色、風雲於玄覽之中（『本朝統文粹』卷九、大江隆兼「暮春於秘書閣、同賦」禁庭松表貞詩」序）

名花異草之珍奇、朝夕于玄覽之下、山顔水色之環富、造化于丹墀之前（同卷九、藤原義忠「暮春侍宴、同賦」花樹遶池岸、応製詩」序）

微辟—取り立てる、引き立てる、上位の者が卑位の者を召し出す。平安朝では、宴や詩歌の会に参加を求める場合に用いる例が多い。ここでは白河院が鳥羽院で明月を愛でるに当たって、お召しにあずかったということ。

蓬宮芸閣賜宴之筵、必蒙其微辟、王公卿相言詩之座、必列其風塵（『本朝文粹』卷六・165、大江以言「請特蒙天恩、因准先例、依儒学旁、被兼任弁官闕左右衛門權佐申他官替上状」）

宇治前大相国、又為被賦詩、忝有微辟（『本朝統文粹』卷十一、大江匡房「暮年詩記」。『朝野群載』卷三）

月卿雲客—「月卿」は大正、公卿。「雲客」は殿上人。参会した人々については「中右記」参照。

月卿雲客、響応景從（『本朝統文粹』卷九、藤原有信「夏日陪博陸書閣、同賦」松風報三万年、応教詩」序）

月卿雲客、陪椒房之者多矣（同卷十、藤原季仲「早春詠」子日和歌」序）

旧僕—昔の家臣・下僕。歌会の参加者が、昔から白河院に仕えてきた人々であることを言う。

王公卿士、皆是龍尾之昔臣、墨客伶人、莫不鳳城之旧僕（『本朝文粹』卷十・306、大江朝綱「暮春同賦」落花乱舞衣、各分一字、応太上皇製」序）

「去年春、中書大王排花閣命詩酒。……翰墨之庸奴、藩邸之旧僕。……」（『本朝麗藻』卷下・152、藤原為時詩題）

抽—抜き出す、引き出す。

抽子秘思、騁子妍辞（『文選』卷十三、南朝宋の謝靈運「雪賦」）

聊抽短懷、敢為唱首（『本朝文粹』卷八・213、藤原篤茂「冬日陪藤相公亭子、同賦」消酒雪中天、各分二字」序）

丹心—まごころ、ありのままの思い。

漢朗詠集』卷上・243・十五夜)

山影倒穿、表裏千重之翠、月輪落照、高低兩顆之珠。(『菅家文章』

卷七・515、「秋湖賦」)

「珠」は月の比喩であり、空に浮かぶ月と水面に映る月を対比するとともに、その二つの月を眺めている。ここはこれら先行する例を念頭に置いた表現であろう。

水因月増映―池の水面は月によっていつそう輝く。「増映」は輝きを増すの意。

増映・応・同・残月助、孤奢不被・暁霜摧(『雑言奉和』、大藏善行「惜・秋・翫・殘・菊、・応・製」)

月因水添光―月は水面に映ることによって光を増す。「添光」は輝きを添えるの意。

下・簾・山・足・晴、開・戸・日・添・光。(盛唐陳希烈「賦得・雲生・棟・梁・間」)

当・林・園・之・改・色、翫・草・樹・之・添・光。(『本朝文粹』卷十一・320、大江朝綱「早春侍・内宴、同賦・晴・添・草・樹・光、・応・製」序)

山吐雲晴樹競・粧、高低無・処不・添・光。(大江朝綱「屏風土代」、
「問・春」)

「添」と前句の「増」との対に、「柳絮飄兮紛々、平沙之雪添・艶、杏艷落兮片々、遊塵之虹増・紅」(『扶桑古文集』、平祐俊「暮春同詠・落花埋・庭和歌」序)がある。以上の二組の対は、池の水は月によって、月は池の水面によって、さらに輝くと述べ、この夜の主たる興趣を強調する。この対句に類似した例に、

観・夫・月・光・依・水・而・清・明、水・色・迎・月・而・映・徹。臨・瑠・淵・而・増・玲・瓏、碧・落・雲・斂・之・暎、照・沙・浜・而・添・皓・潔、銀・漢・霧・晴・之・秋。(『詩序集』下

・40、藤原明衡「秋夜侍・源・亞・相・淳・風・坊・水・閣・守・庚・申、同・賦・月・光・依・水・明、・応・製」序)

がある。なお月の光と池の水について、『中右記』には、「于・時・雲・収・天・末、月・明・池・上」(史料大成本・大日本古記録本には「于・時・雲・収、天・末・月・明、池・上・糸・竹・之・調、興・入・幽・玄」とあるが、このあたりは四字句がつづいていると見るべきこと、「天・末・月・明」では空がまだ明るくなっていない意となり、「雲・収」と釣り合わないことなどを根拠に、本文を改めた。これによって、「雲・収」以下の二句は対をなすことになる)と記しており、序はほぼ実景を描いていると言えよう。

調・糸・竹―管絃の遊びを催したということ。『中右記』には、雲が消えて月が池に明るく映っている時、船上で楽を奏したとあり、これを「興・入・幽・玄」と評している。

賞・翫―めで味わう。味わい楽しむ。

躋・攀・有・次・第、賞・玩・無・昏・早。(『白氏文集』卷八・372、「除・官・未・去・間」)

大・王・命・曰、書・閣・之・畔、有・一・株・桜。願・待・花・開、共・相・賞・翫。(『本朝文粹』卷十・297、「晚・春・陪・上・州・大・王・臨・水・閣、同・賦・香・乱・花・難・識、・応・製」序)

尋・筆・硯―詩文を作ること。ここでは和歌を詠じること。「筆・硯」はふとすずり。詩文創作に必要な文具。

一・二・年・来、日・尋・筆・硯、同・和・贈・答、不・覺・滋・多。(『旧唐書』卷一六〇・劉禹錫伝)

就・籬・下・而・引・絃・歌、繞・叢・辺・而・尋・筆・硯。(『菅家文章』卷五・356、「惜・殘・菊、各・分・二・字、・応・製」序。『本朝文粹』卷十一・329)

嗟歎―感心する、感嘆するの意。水面に映った月光のみごとさへの感嘆である。

詩者志之所_レ之也。……言之不_レ足。故嗟_レ嘆_レ之。嗟_レ嘆_レ之不_レ足。故永歌之（『文選』卷四十五、周の卜商「毛詩序」）

『中右記』の和歌披講では、「召_レ新中納言通俊卿、被_レ講御製。誠以優妙也。不_レ足_レ嗟歎、満座諷詠」と見える。これは御製のすばらしさを高く評価したものの。この記事は右の「毛詩序」の表現を踏まえている。

清光―清らかな月の光、澄み切った月光。

清光映徹、雲書巻以添_レ晴、皓彩時凝、露文注而助_レ潔（『本朝文粹』卷八・210、都在中「八月十五夜、於_レ文章院」対_レ月、同賦「清光千里同」序）

寔謂_レ清光之勝絶、多在_レ遍照之道場（『本朝統文粹』卷八、藤原実範「八月十五夜、於_レ遍照寺詠_レ月詩」序）

碧沼―あおい色の池。鳥羽院の前庭の池。

深夜熠燿、照_レ于碧沼、霜天蟋蟀、吟_レ于青閨（『本朝統文粹』卷一、大江匡房「秋日閑居賦」）

瓊林碧沼之象、神仙也、徧_レ周瑤於万里之浪、華閣柳榭之極_レ壯麗也、嘲_レ漢栢於千載之風（同卷九、大江隆兼「暮春於_レ秘書閣」、同賦「禁庭松表_レ貞詩」序）

皎々―白く輝く様。こゝは月の光について言う。

析析就_レ衰林、皎皎明_レ秋月（『文選』卷二十、南朝宋の謝靈運「鄰里相_レ送方山詩」）

澄澄遍照、禁庭之草載_レ霜、皎々斜沈、御溝之水含_レ玉（『本朝文粹』卷八・207、紀長谷雄「八月十五夜、同賦_レ天高秋月明、各分_レ

一字、応製」序）

桂華晴以景皎々、蘭樽酌以醉陶々（『本朝統文粹』卷九、藤原正家「秋日陪_レ博陸書閣、同賦_レ勝地植_レ松樹「応_レ教詩」序。「桂華」は月の異称）

鶯鷺―伝説上の霊鳥。ここでは殿上人のこと（『拾芥抄』中・官職唐名）。「鷺」は、底本は損傷、『王沢不渴抄』『本朝文集』は「鶯」に作るが、女房の意をあらわす「窈窕」と対をなす例のあること、殿上人の唐名と見るべきであろうことから、「鷺」に改めた。

久別_レ鶯鷺侶、深随_レ鳥獸群（『白氏文集』卷十六・0986、「黄石巖下作」）

羽林馮翊鶯鷺侶、吏部肥州錦繡詞（『江吏部集』卷上、「冬夜与_レ諸君_レ談話」）

鶯鷺連_レ袂謳吟、窈窕隔_レ簾談咲（『本朝文粹』卷十一・346、藤原齐信「後一条院御時女一宮御着袴翌日宴和歌序」）

蕩颺―揺れ動きたたようさま。蕩漾に同じ。「鶯鷺」が「蕩颺」するとは、殿上人の乗った船が池上をただようこと。

岸松倒影、紫鱗游_レ泳于千年之緑、浦桃瀉_レ粧、綵鴛蕩_レ颺于数片之紅（『本朝統文粹』卷三、菅原是綱「江湖勝趣」对策文）

翅―鳥の羽、つばさ。『和名抄』（卷十八・羽族体）に「翼_レ唐韻云、翅_レ施智反、去声之輕、和名都波佐_レ鳥翼也。……」とある。

洲香杜若抽_レ心長、沙暖鴛鴦鋪_レ翅眠（『白氏文集』卷三・0137、「昆明春水滿」）。「千載佳句」上・36・春興。『和漢朗詠集』卷下・

511・水）

征馬鳴_レ珥、秋踏_レ仙珂之雪、宿禽斂_レ翅、夜栖_レ二枝之風（『本朝文粹』卷一・8、紀齐名「落葉賦」）

負水―水を背負う。「鵞鸞」の衣服が月の光を浴びて、白く光って見えるさまを喩える。

参差落_レ水、暗伴_レ負_レ水之鱗、聚散遍_レ林、欲_レ閉_レ宿_レ巢之鳥
 『本朝文粹』卷一・4、紀長谷雄「春雪賦」。『朝野群載』卷一）
 濼梁波暖、及_レ春仁於負_レ水之鱗、河漢雲晴、守_レ秋信於隨_レ陽之翅
 『大日本史料』第二編七卷所引、長和元（一〇一二）年十一月二十五日付朔旦冬至の詔

二例ともに文字通り魚が氷に閉ざされていることを言う。

素影―月の白い光。

霧濯_レ清輝_レ苦、風飄_レ素影_レ寒（初唐杜審言「和_レ康五庭芝望_レ月有_レ懷」）

学書倪裡金波滴、画扇峯前素影遙（『本朝無題詩』卷三・153、藤原明衡「六波羅蜜寺对_レ月」）

翠簾―青い簾。『中右記』には、「鳥羽殿南御所寝殿東面」に「女院（郁芳門院媼子）がおわし、「女房南東面打出」とある。寝殿にこの「翠簾」を下ろしていたのであろう。

南望則有_レ関路之長、行人征馬駱、馱於翠簾之下、東顧亦有_レ林塘之妙、紫鴛白鷗道_レ遙於朱檻之前（『本朝文粹』卷十一・323、源順「秋日遊_レ白河院」、同賦「秋花逐_レ露開」序。『和漢朗詠集』卷下・558・山家）

孤叢露低、羅衣重而猶無_レ氣力、仙架霞薄、翠簾透而不_レ秘_レ容顏
 （『本朝続文粹』卷十、藤原敦光「初冬侍_レ中殿」、同賦「殘菊似_レ佳妓、応_レ製詩」序）

沈々―ひっそりと静まりかえったさま。

透_レ影燈耿耿、籠_レ光月沈_レ沈（『白氏文集』卷九・0492、「和_レ元九

悼_レ往）

銀台金闕夕沈_レ沈、独宿相思在_レ翰林（同卷十四・0724、「八月十五夜、禁中独直、对_レ月憶_レ元九」）

窈窕―もとは、「窈窕_レ淑女、君子好逑」（『毛詩』周南「関雎」。毛伝「窈窕幽閒也」とあるように、女性の物静かで、たおやかな様をあらわす。ここでは、そのような女性のことであり、女房らをこのように呼んだ。「鵞鸞」において引いた、藤原齊信の和歌序（『本朝文粹』卷十一・346）参照。そのほかに、

長繩高懸_レ芳枝、窈窕翩翩仙客姿（『経国集』卷十一・105、嵯峨天皇「雑言鞦韆篇」）

庭華色々、窈窕之袖添_レ薰、宮鶯声々、鳳凰之管和_レ曲（『本朝続文粹』卷十、藤原季仲「早春詠_レ子日_レ和歌」序）

などがある。

錦繡―錦と刺繡を施した衣服、美しい着物。女房らが身に着けた衣装。御簾の外に出した衣服のことであろう。

青衣伝_レ氎褥、錦繡一条斜（『白氏文集』卷五十六・2670、「和_レ春深二十首」ノ十八）

翠黛紅顏錦繡粧、泣尋_レ沙塞_レ出家郷（『和漢朗詠集』卷下・699・王昭君、大江朝綱）

翻雪―月に照らされて白く映る、女房らの打出の袖が動く様を、雪が翻ると見なした。先に引いた『中右記』にあるとおり、「打出」の装束に月の光が輝いていたのである。

蕩_レ風波眼急、翻_レ雪浪心寒（『白氏文集』卷五十五・2609、「魏娘有_レ懷」）

遙_レ看逆浪愁翻_レ雪、漸失征帆錯認_レ雲（『千載佳句』下・909・送別、

中唐元稹「送致用」

葉錦敗風秋尽夕、木綿翻雪日晴辰（『本朝無題詩』卷十・74、

藤原敦基「九月尽日、陪天満天神祠」（撰州）

の、前二者は波が、後者は神事に用いる幣帛がひるがえる場合について言う。

（現代語訳）

折しも、池の上には月があり、月の下この池の水を望んでいる。池の水は月の光によって輝きを増し、月は池の水によってさらに光を添えている。そこであるいは管絃を奏して愛で楽しみ、あるいは和歌を作って感嘆の声をもらした。ましてや、澄んだ月光が青い水の池に照り映えて明るく、鸚鵡（殿上人）が水面に揺れてその翅（衣服）が水を背負うかのように輝き、白い月の光がみどりの御簾をとおってひっそりと降り注ぎ、女人（女房）のあでやかな衣装の袖が動いて雪を翻すかのようなのである。なおさらである。

(3)遊宴の美、地に忍ぶこと能はず。請ふらくは「池上の月を翫ぶ」を以つて、各おの和歌の題目と為さむことを、其の詞に云ふ、

遊宴之美―月見の宴のすばらしさ。

地忍―ただじつとしてゐる、ひたすらこらえている。「地」は惟、但に同じ。強調表現。『漢書』（巻七十四・丙吉伝）の「吉曰、以酔飽之失去士、使此人將復何所容。西曹地忍之」（李奇注「地猶第也」、顔師古注「地亦但也。語声之急耳」。「第」「但」はともに、「ただ」の意）にもとづく語。藤原清輔の『統詞花和歌集』跋に、

「不能地忍、愁備天覽」とある（鈴木・北山『平安後期歌書と漢文学』和泉書院、二〇一四年、所収。その注参照）。今日のすばらしい宴に加わりながらじつとしてはいられない。それで池に映つた月を愛でる歌を詠もうということになったと述べる。

其詞云―述べる文章・詩歌は次のとおり。序の文章を終え、以下に詩文等を引く。鈴木・北山「柿本人麿影供（元永元年）」（『平安後期歌書と漢文学』前掲、所収）において取り上げた、藤原敦光「夏日於三品將作大匠水閣、同詠水風晚來和歌一首」序（『柿本影供記』）に「情感不盡、聊而詠吟。其詞云」とある。その注参照。

以極衆人之所眩曜、折以今之法度。其詞曰（『文選』卷一、後漢の班固「兩都賦序」）

愁詠和歌、聊慰老思。其詞曰（『江吏部集』卷中、「暮秋泛大江井河、各言所懷和歌序」。『本朝文粹』卷十一・351）

（現代語訳）

この十五夜の宴のすばらしさに対しては、何もしいではないらしい。そこで、それぞれが「池上の月を翫ぶ」を題として、和歌を詠じていただきたい。その歌は次のとおり、

付説

この歌会の披講の模様を、『中右記』の記事によって述べておく。「女院」郁芳門院媯子の「御方（東面）」で行われた。題は「翫池上月」、「序題」は「帥」源経信、「講師」は「予」つまり日記を記した藤原宗忠、「読師」は「左大臣」源俊房。「大納言」正二位藤原宗俊の歌を講じた後、披講が進まない。それは「左大臣」従一位源俊房と

「関白殿」正二位藤原師通のどちらを先に講じるかが決まらなかったからであった。決着は「大殿」従一位藤原師実の「命」によって、「関白殿」が先となった。「左大臣」「大殿」と講じる間に、「女房」が「簾中」から「三首歌」を提出してきた。これも講じた。どれも「秀歌」であり、人々が「感歎」した。次に「御製」（白河院）を「関白」に給い、「大殿」に伝えられた。「大殿」の指図で、「講師」が臣下の和歌を撒り去り——文台に和歌が置いてあったのであろう——、「新中納言（藤原）通俊」を召して、「御製」を講じた。「誠に優妙也。不_レ足_二嗟歎_一、満座諷詠」と、皆がその「優妙」を讃え朗唱したとある。

この時の詠と思われる和歌は次の通り。引用は、『新編国歌大観』により、表記を便宜に改めている。まずは白河院・経信・匡房の詠歌。経信と匡房の家集に、

『経信集』113

八月十五夜、鳥羽殿にて、池上月有序

てる月のいはまの水にやどらずは玉ある数をいかでしらまし

『江帥集』102

鳥羽殿の池の上の月

いけみづにうつれる月ぞさだめなきすむとやいはんやどるとやいはん

とある。次に『金葉集』（二度本）秋180・181（同三奏本171・172にも。180は『和歌一字抄』にも）に、

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて翫池上月といへることをよませ給ひける

院御製

いけみづにこよひの月をうつしもてこころのままにわが物と見る

大納言経信

てる月のいはまのみづにやどらずはたまあるかずをいかでしらまし

とある。さらに、以下のような撰集によれば、師実・俊忠・公実・忠実の詠がひろえる。

『統古今集』秋上402

鳥羽にて、池上月を

京極前関白太政大臣（師実）

おほぞらもいけのおもてもくもりなくこよひはみちてすめる月かな

『統拾遺集』賀740

寛治八年鳥羽殿にて、翫池上月といへるこころを

権中納言俊忠

のどかなる光をそへて池水にちよもすむべき秋の夜の月

『統後拾遺集』賀619

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて、翫池上月といへる心を

大納言公実

夜とともにさわがぬ池の水なればのどかにぞすむ秋の月影

『新千載集』慶賀2325

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて、翫池上月といへるこころを

富家人道前関白太政大臣（忠実）

いっかへりすまんとすらむ池水はうつれる月の影ものどけし

このうち、白河院と経信の詠歌には『袋草紙』雑談に逸話がある。同書が「九月十三夜」とするのは誤り。『袋草紙』は、新日本古典文学大系（岩波書店）による。

白川院、鳥羽殿における九月十三夜の「池上の月」の和歌に、序者経信卿の歌に云はく、

てる月のいはまの水にやどらずは玉あるかずをいかでしらし
「池」の字なきの由をもつてこれを傾く。俊頼語りて云はく、「この由、経信云はく、「しかいふなりにや」とて他の答なし」と云々。

同じ和歌の御製に云はく、

池水にこよひの月をやどしして心のままにわがものとみる
これは女房堀川殿大宮右府女の歌なり。而して内々に今日の和歌いかがと御尋ねの処に、この歌を申すなり。秀逸の歌なり。仍りて仰せに云はく、「汝が歌に似ず、我が歌になすべし」とて御製となると云々。

この時の歌には不思議の事ども有り。高松宰相公定は月なき歌を詠ず。世の人「無月の宰相」と称す。また故治部卿能俊卿の歌に云はく、

池水にかけをうつして秋の夜の月のなかなる月をこそ見れ
これをば「天変の少将」と号すと云々。時に少将なり。

歌題は「菼池上月」であったが、経信の詠歌には「池」の字が詠み込まれていなかった。詠歌中の「岩間の水」を池の意とするのは適当ではないであろう（『八雲御抄』正義部に「経信は菼池上月といふにはまの水とよみて池に用ゐる」とある）。岩と岩の間を流れる山川の水であれば、下句「玉あるかずをいかでしらし」の表現も納得できる。「池」の字がなく題意にそぐわない内容と世人が難じたが、俊頼によれば、これを聞いた経信は「しかいふなりにや」（そのように言っているのか）と言ったまま口を閉ざしたという。

白河院の御製は、郁芳門院の女房、堀川殿（右大臣俊家の女）が内々に促されて詠んだ秀歌であった。院自らが、お前の歌としてはふさわしくない（下句の表現を指すのであろう）といつて取り上げてしまったという。

また、公定（参議従三位皇太后宮権大夫・備前権守）と能俊（従四位上少将）の詠を追加できる。それぞれの詠歌から「無月の宰相」「天変の少将」とあだ名を付けられたという。『中右記』当日条に、公定は「皇太后宮権大夫」としてみえ、白河院の御船に陪乗し「付歌」の役を務めているが、能俊は、名がみえない。

なお、本歌会は、『八雲御抄』作法部に「寛治月宴」として引かれ、月見歌会の規範となっている。

『中右記』（嘉保元年八月）。大日本古記録所収の本文により、訓読を示す。

十四日、天陰雨下。……明夕為御覽月可有乗船興。着布衣可参入之由、従鳥羽殿有召。

十四日、天陰りて雨下る。……明夕月を御覽ぜむが為、乗船の興有るべし。布衣を着て参入すべき由、鳥羽殿従り召し有り。

十五日、天晴。午時許候大納言殿御車後、参入鳥羽殿。先於宰相直廬休息、具申大納言殿。申時許参入大殿御直廬。則引公卿令参御先鳥羽殿南御所寝殿東面。女院同御也。女房南東面打出。公卿座西廊居饗饌。人々雖被着、無盃酒儀。已依日暮也。寄御船於東渡殿、上皇令乗給。大殿・左大臣・関白殿・藤大納言・中宮大夫（師忠）・左大将

〔忠〕・皇太后宮権大夫〔公〕・新宰相中将〔宗通〕、此外宗忠并左少将有賢、依召候御船。有別仰。帥大納言〔経信〕・備中守政長朝臣、可候御船者。以御隨身被相尋問、已及数剋。兩人追被参加之後出御船。御船指四人、判官代勘解由次官顕隆・散位忠清・藏人高階為賢・源家時〔皆布衣〕。

十五日、天晴る。午時許りに大納言殿の御車の後に候して、鳥羽殿に参入す。先づ宰相の直廬に休息して、大納言殿に具申す。申時許りに大殿の御直廬に参入す。則ち公卿を引きて先づ鳥羽殿南御所寢殿東面に参り御さしむ。女院同じく御すなり。女房南東面に打出す。公卿の座の西廊に饗饌を居う。人々着せらると雖も、盃酒の儀無し。已に日暮るるに依るなり。御船を東渡殿に寄す。上皇乗らしめ給ふ。大殿・左大臣・関白殿・藤大納言・中宮大夫〔師忠〕・左大将〔忠〕・皇太后宮権大夫〔公〕・新宰相中将〔宗通〕、此外宗忠並びに左少将有賢、召しに依りて御船に候す。別に仰せ有り。帥大納言〔経信〕・備中守政長朝臣、御船に候すべしてへり。御隨身を以つて相尋ねらるる間、已に数剋に及ぶ。兩人追ひて参加せられし後に御船を出す。御船指四人、判官代勘解由次官顕隆・散位忠清・藏人高階為賢・源家時〔皆布衣〕。

上達部船、新大納言〔家忠〕、右衛門督〔公実〕、藤中納言〔基忠〕、新中納言〔通俊〕、江中納言〔匡房〕、左宰相中将〔仲実〕、右衛門督〔雅俊〕、中宮権大夫〔能実〕。以武者所四人為船指〔布衣〕。殿上人船、頭中将国信朝臣、四十人許皆布衣。此外御隨身、副小船前行。

上達部の船、新大納言〔家忠〕、右衛門督〔公実〕、藤中納言〔基忠〕、新中納言〔通俊〕、江中納言〔匡房〕、左宰相中将〔仲実〕、右

衛門督〔雅俊〕、中宮権大夫〔能実〕。武者所の四人を以つて船指と為す〔布衣〕。殿上人の船、頭中将国信朝臣、四十人許皆布衣。此の外に御隨身、小船に副ひて前行す。

先於御船有御遊。藤大納言〔拍子〕、帥大納言〔琵琶〕、左大将〔箏〕、宰相中将〔笛〕、宗忠〔笙〕、有賢〔和琴〕、皇太后宮権大夫并政長朝臣付歌。先双調、紀伊州、席田、鳥破・急。平調、大平楽破、伊勢海、廻忽、五常楽急。帥大納言朗詠。盤涉調、秋風楽三帖、青海波、蘇香急。各及数反。

先づ御船において御遊有り。藤大納言〔拍子〕、帥大納言〔琵琶〕、左大将〔箏〕、宰相中将〔笛〕、宗忠〔笙〕、有賢〔和琴〕、皇太后宮権大夫並びに政長朝臣付歌。先づ双調、紀伊州、席田、鳥の破・急。平調、大平楽の破、伊勢海、廻忽、五常楽の急。帥大納言朗詠。盤涉調、秋風楽三帖・青海波・蘇香の急。各おの数反に及ぶ。

于時雲収天末、月明池上。糸竹之調、興入幽玄。此間棹小船。但馬守隆時朝臣・甲斐守行実朝臣供御膳〔牙盤六前。有打敷、肴物〕。諸卿伝取供之。次第乍在座取上也。中宮大夫被候陪膳。公卿衝重、便居船之縁。御盃則給大殿、大殿指左大臣、左大臣指関白、次第巡流、及二献。夜及三半從御船令上給了。

時に雲天末に収まり、月池上に明かなり。糸竹の調べ、興幽玄に入る。此の間小船に棹さす。但馬守隆時朝臣・甲斐守行実朝臣御膳を供す〔牙盤六前。打敷、肴物有り〕。諸卿伝へ取りて供す。次第に座に在り乍ら取り上ぐるなり。中宮大夫陪膳に候せらる。公卿の衝重、便はち船に居る縁なり。御盃は則ち大殿に給ひ、大殿左

大臣に指し、左大臣関白に指す。次第に巡流し、二献に及ぶ。夜三公卿の半に及びて、御船従り上がらしめ給ひ了りぬ。船、朗詠数度。

於女院御方（東面）、被講和歌。題云、翫池上月。序題師、予勤仕講師、左大臣為読師。講大納言歌了後、頃而頗遅遅。是左大臣与関白殿歌次第之事也。依大殿命、先講関白殿歌。次左大臣、次大殿。此間女房從簾中、被出三首歌。書薄様三重、被置扇上（扇銀骨、画図殊妙）。同講之。皆以秀歌也。人々感歎。爰從簾中給御製於関白、関白伝献大殿。便宜也。大殿令気色。講師起座、撤臣下歌、召新中納言通俊卿被講御製。誠以優妙也。不足嗟歎、満座諷詠。及暁更各々分散。

女院の御方（東面）において、和歌を講ぜらる。題に云ふ、「池上月を翫ぶ」と。序題は師、予講師を勤仕し、左大臣読師と為る。大納言の歌を講じ了りし後、頃しばらく而するも頗ぶる遅遅たり。是れ左大臣と関白殿との歌の次第の事なり。大殿の命に依りて、先づ関白殿の歌を講ず。次に左大臣、次に大殿。此の間女房簾中従り、三首の歌を出さる。薄様三重に書き、扇の上に置かる（扇は銀の骨、画図殊に妙なり）。同じく之を講ず。皆以つて秀歌なり。人々感歎す。爰に簾中従り御製を関白に給ひ、関白大殿に伝へ献る。便宜なり。大殿気色せしむ。講師座を起ち、臣下の歌を撤り、新中納言通俊卿を召して御製を講ぜらる。誠以つて優妙なり。嗟歎するに足らず、満座諷詠す。暁更に及びて各おの分散す。

（注）「于時雲収天末、月明池上」については、語釈「月因水添光」の項を参照。